



原著者ワード氏の叔父 H.J. リッキー氏の写真。
リッキー氏は、イギリスで 1914 年 1 月 5 日死去。
(本書は、叔父リッキーからの霊界通信をワードが
自動書記で受信したその記録です。)

本書は「ワードの『死後の世界』」
の書名で、昭和六十三年に(株)コスモ・
テン・パブリケーションから発行され
ていましたが、このたび「ワンネス・
ブックスシリーズ」の一冊に加えるた
めに、新版として多くのぼう出版社か
ら発行いたしました。

旧版の序文

これは物語ではありません。小説のように面白く、劇画のように変化に富んでいます。決して、つくられた物語ではありません。ほんものの霊界通信、すなわち、真実の死後の世界の姿を伝えたものです。イギリスのワード氏が自動書記という方法で、霊からの通信を受け取ったもので、世界で最も広く読まれている霊界通信の一つです。日本でも浅野和三郎氏の名訳で、ワードの「死後の世界」としてよく知られています。本書は若い人々に読んでもらう目的で、原著を圧縮して、新しく書き直しました。しかし、あくまでも原著に忠実に、真実を伝えるように配慮しました。

霊界通信としての本書の特色は、地獄の模様を生々しく伝えていることです。それも、地獄のどん底までおちて、そこからもう一度はい上がって来た人物の

体験を、そのまま伝えているので、まさに真にせまり、全体が小説のように波乱に満ちています。

ただ、読者の方々に知っておいていただきたいことは、地獄はたしかに存在していますが、死後の世界というのは広く深く、なかなか一筋縄ではいかぬということなのです。すなわち、死後の世界というのは、物質世界のように、つくりつけの世界ではないのです。「心」がつくる世界です。ですから、人の心がそれぞれ違うように、その世界は沢山あるということなのです。従って、本書の陸軍士官が経験した地獄は、彼にとつては真実そのものでしたが、誰にとつても、何から何まであのとおりだとは限らない、ということを知っておいて下さい。また、心がつくる世界といつても、ふわふわした夢の世界ではありません。世界で心ほど真実なものはありません。ですから心をつくる世界は、死後の霊にとつては、地上で私達が経験するのと同じように、現実そのものです。

また、心が真実なものであるのと同時に、もう一つ、心にはすべての人に共

通した性質があります。従って、心がつくる死後の世界には、左記のような真実にして共通の性質、すなわち法則があります。

① 人が死後に入る世界は、心の程度（清らかさ、または罪けがれ）に応じて、天国から地獄まで、沢山の階層に分かれていること。

② 心が浄化すれば、その住む世界も上方へと進歩すること。

③ 心が暗く汚れている人には、現実に地獄が存在すること。その見る風景や、経験する出来事は人によって違うが、下層ほど暗く苦痛であることは、共通していること。改悛と心の浄化で、そこから脱出できること。

右のような法則からおしはかる時、陸軍士官が経験した、「どん底の闇地獄」「鬼に追われる地獄」「残忍地獄」「欲望地獄」「唯物主義者の地獄」「にせ紳士の俗物地獄」、このように、同じ心の人が集まって、同じような苦しみを経験している世界がないとは言えません。同じように、叔父さんの住む「夕日の国」（半信仰の人々の国）、その上の「黎明の国」（れいめい信仰心をもつ人々の国）、更にその上

の「常夏じょうなつの国」(確信をもつ人々の国)も、ないとはいえないでしょう。更に更に、火の壁(第二の死)を越えて、すばらしい天国が実在していることも、十分に考えられます。

私達は、肉眼でしかものが見えず、肉眼で見たもの、つまり物質世界しかないと思つて生活していますが、本当は肉眼で見えないところに、私達の知らない霊の世界があり、私達は死ぬと、滅びることなく、霊となつて霊の世界に入つて、自分の心の美しさや清らかさに応じて、それぞれの生活を続けるのではないのでしょうか。

また、この現実の物質世界の生活においても、たとえば霊の憑依ひょういを受けたり、または色々な霊からの影響を受けながら、生きているのではないのでしょうか。もしそうだとすれば、私達は考え方を改めて、もつと霊のことを知らねばなりません。それも、正しい霊の真実を知るように、勉強せねばならないと思われまます。それが自分の幸福であり、また、世界が良くなるための大切な道ではな

いでしょうか。

本書の「死後の世界」は、そういう意味で、正しい霊の知識を与えてくれる
ものです。どうか、本書が広く沢山の人々に読まれるようにと希望しています。

一九八八・八・二七

編著者 記